



「地球環境に貢献する企業であり続けたい」と熱く語る阪口社長



エコフィードで飼育した「紀州和華牛」。通常の霜降り肉よりも赤身部分が多いのが特徴



「湯浅エコファーム実証牧場」に掲げられた「紀州和華牛」の看板

食品残渣の活用で、循環型社会を構築

畜産業においては、広大な土地での飼料生産が地球環境にとつての負荷となる。こうした指摘がされるなか、産業廃棄物処理の過程で回収される食品残渣を活用し、家畜用飼料「エコフィード」(「エコ」と「飼料」を合わせた造語)を開発、生産するのがエコマネジメント(株)(和歌山市、阪口宗平社長)だ。

同社は1973(昭和48)年、主に産業廃棄物の収集運搬業として創業。2006年に中間処理業に進出し、現社長が法人を設立した。当時和歌山県で盛んだった染色業の汚泥処理から、食品残渣の処理へ業容を拡大する過程で、エコフィードの開発に着手。現在は地域の畜産農家に

原料には、おからだけでなく、地場の食品加工工場から出る残渣を利用している。広く利用されている。エコフィードの本格生産とブランド和牛「紀州和華牛」

用。3年かけてビタミン豊富で栄養バランスの良い飼料を開発した。さらにビタミン制限をせず、高タンパク低カロリーのこの飼料を与えることで、脂身の少ない「赤身の牛」が育つことがわかった。エコフィードの効果を検証するため、同社は実証牧場を取得し、畜産業にも進出。「何もわからなかったが、怖いもの知らずの精神で飛び込んだ」と阪口社長は振り返る。エコフィードで飼育された牛は2019年、同社独自の「紀州和華牛」ブランドとして県から認定された。

「10年先を見据えた事業展開 環境負荷低減を発信」

現在、飼育頭数は300頭に増えた。だが、あくまでもエコフィードの「実証実験」との位置づけは変わらない。エコフィードにはビタミンが多く含まれるため、飼育中の牛のストレスが軽減され、アニマルウェルフェアに繋がることがわかった。また原料も、輸入に頼らず地元から調達し、さらに乾燥機を使用せず天日干し加工を行うことで、エネルギー消費量も抑制できる。牛にも、環境にもメリットは大きい。

「今後エコフィード関連事業の拡大を図り、地球環境負荷低減に貢献する企業であり続けたい」と阪口社長は熱く語る。

撮影：吉田和本文、商工研島野紀

「10年先を見据えた事業展開 環境負荷低減を発信」

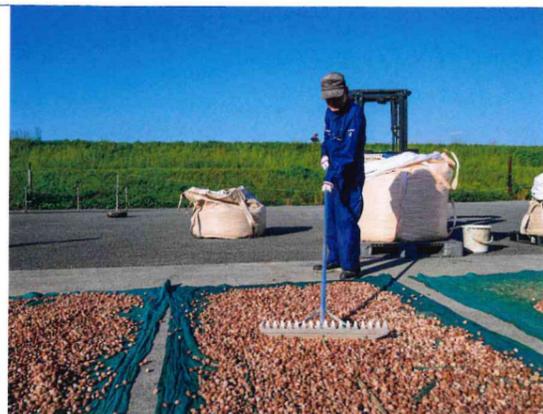
現在、飼育頭数は300頭に増えた。だが、あくまでもエコフィードの「実証実験」との位置づけは変わらない。エコフィードにはビタミンが多く含まれるため、飼育中の牛のストレスが軽減され、アニマルウェルフェアに繋がることがわかった。また原料も、輸入に頼らず地元から調達し、さらに乾燥機を使用せず天日干し加工を行うことで、エネルギー消費量も抑制できる。牛にも、環境にもメリットは大きい。

「10年先を見据えた事業展開 環境負荷低減を発信」

現在、飼育頭数は300頭に増えた。だが、あくまでもエコフィードの「実証実験」との位置づけは変わらない。エコフィードにはビタミンが多く含まれるため、飼育中の牛のストレスが軽減され、アニマルウェルフェアに繋がることがわかった。また原料も、輸入に頼らず地元から調達し、さらに乾燥機を使用せず天日干し加工を行うことで、エネルギー消費量も抑制できる。牛にも、環境にもメリットは大きい。

産廃処理業から業容拡大 食品残渣で独自飼料の開発

エコフィードの本格生産とブランド和牛「紀州和華牛」



エコフィードの原料であるウメの種、ミカンの皮、おから、お茶の出がらしなどの食品残渣は、天日干しにして乾燥させる



乾燥させた食品残渣を粉砕機で処理する



処理が済み、家畜の餌として出荷されるエコフィード

企業データ

エコマネジメント(株)

本社	和歌山市新留丁185		
TEL	073-422-6513	FAX	073-426-2422
HP	https://www.w-ecomangement.co.jp/		
創業	1973(昭和48)年4月	設立	2006(平成18)年3月
資本金	1000万円	従業員	33名
年商	7億円(2025年2月期、見込み)		

ビタミン豊富で脂身の少ない 画期的な「赤身の牛」



エコフィードを食べる「湯浅エコファーム実証牧場」の牛と、牛舎の外で遊ぶ子牛。母牛が子牛を生む「繁殖」と、肉として出荷するまで飼育する「肥育」の両方を行う一貫経営も、他社との差別化に繋がっている



年に一度の牛の爪切りの様子。特殊な技術が必要だ